

小説家 真山仁

ラジコンヘリ暴走なんて有り得ない  
設定だけ……

かつて真山仁氏は世間一般で語られる先入観に縛られた農業イメージを持っていた。しかし、多くの人に取材していくうちに全く違う農業が見えてきたという。「黙示」とそのプロローグともいえる前著「フライド」には、農家、農水官僚、政治家、農業業界人などが登場する。そして、農薬や遺伝子組み換えなどの農業技術や農業政策、農村社会そのものも話題にされるが、単にそれを批判するのではなく、読者自身に自らの有り様を問う作品になっている。

官僚批判するより、  
彼らには誇りを持ってほしい

昆吉則（本誌編集長） 最新刊の『黙示』を読ませていただきました。農業を取り上げる小説は多いですが、でもステレオタイプな農業理解を前程とした作品ばかりで、僕らは毎回イライラしていた（笑）。そこを正面からやっていただいて、非常にありがたいと思いました。

真山 ありがとうございます。

昆 たえば冒頭のラジコンヘリが暴走する場面。あの箇所は「読んでら激高するかもしれないよ」と言われていたので、心配していたんです（笑）。農業界の反応はいかがでしたか。

真山 連載開始当初、一部では叩かれましたね。ただ小説としては、無関心な人に関心を持ってもらうため、強烈なインパクトも必要なので、あのような書き出しにしました。農

薬ネットを運営している西田さんを取材した際、『ハゲタカ』を読まれている、「ここまで踏み込んでくれるんだったら、農薬についてもしっかり書いてほしい」と言っていたいただきました。そこで冒頭のアイデアを説明したら、しばらく天を仰いでましたが、「いいんじゃないんですか」と。西田さんが取材協力していたことが知れ渡ると、反発も収まりました。

部外者がひとつの業界を取り上げる場合、どうしても遠慮してしまいがちです。でも無理に良く書くとうると怒られて、実はちゃんと書いた方が文句を言われぬ。「ハゲタカ」を書いた時も、最初に投資銀行の関係者が反応して「世間はこういう内情を知らないから我々はめちゃくちゃ言われていた。それをよく書

いてくれた。誇りを持てる」と褒められました。

昆 農業は金融以上に特殊な業界ですから、反応の温度差はあるかもしれませんが、私は「科学的な視点を持って当たり前を考えてみよう」という誠実な姿勢で、農業を優しく見ているなと感じました。ただし、ある元農水省の人間は、真山さんの小説を「官僚に期待しすぎだ」と評していました（笑）。

真山 中の人はそう思うかもしれませんが。私は官僚批判が嫌なのです。結局、あれはエリートに対するやつかみじゃないか、と思う。確かにひどい人もいますが、国を動かすには官僚を上手に使う必要があるし、彼らに誇りを持ってもらわなければ困る。官僚を敵か味方かで見ている間は、この国は決してよくならないわ

けです。だから小説では確かに、期待を込めて描いています。

昆 必ずいい方向に向かうはずだという期待は、世の中や歴史を動かす推進力になりますからね。

### 歪んだヒューマニズムで 農業の可能性をつぶすな

昆 真山さんの短編集『プライド』を読んで、そのタイトルが思いを表してるなと思いました。それぞれ立ち場や意見が違ったとしても、ちゃんとした人間ならプライドを持って仕事するはずだ、という問いかけがあるんじゃないですか。

真山 そうですね。日本はプロフェッショナルを非常にリスペクトしてきた国だと思います。少々人間



性に問題があっても、プロとして何かを貫いている人に対して尊敬の念を持つてきた。それがこの20年ほどで、口が上手くて短期で結果を出した人だけが評価されるようになった気がします。その結果、プロとして責任を取らない人、あるいは自虐的に破滅していくプロが増えていったんじゃないでしょうか。私にとってプロとは「言い訳をしない」人です。

昆 自分で責任を負うということですね。農業に取り組む時も、科学的にリスク管理が証明されたものを適切に使って、お客さんに対する責任を自覚することが最低限の務めです。そうしたプライドが失われてしまったから、日本の農業が今のような状況になってしまった。もっと言うなら、敗北主義が利権化したものが現在の農業界です。負けてないと税金がもらえないし、負けないとT P P対策費がもらえない。そしてそのことに農業団体や関係者が一生懸命になっていっている。皆で貧しく一緒にやっついていこうという貧農史観が植えつけられて、プライドも何もあつたものではありません。悪いこと一般のメディアもそれに乗っかっていきます。それに近い枠組みはG M Oの問題でも感じます。

真山 まさに『黙示』で扱ったテーマですね。

昆 現在、遺伝子マーカーを使った育種の技術もどんどん進んでいて、組み換えに関しても最初の頃の除草剤耐性のレベルからかなり進化している。それが1970年代の農業批判と同レベルのことをまだ繰り返している。

真山 『黙示』を世に出した時、レイチェル・カーソンを引つ張り出されて、「まだそれか」と思いました。『沈黙の春』はあの時代に出たから意味があつたわけで、当時と使っている農業も環境もあらゆるものが違いますから。

G M Oに関心を持っている学生に「怖いと感じるのは理解できる。でも食糧不足で人がバタバタ死んでいく中で、砂漠に育つG M Oのトウモロコシを抜きますか？」と聞いたら、思いも寄らなかつた考えだつたように、驚いていました。私が思うに、怖いからやめようというのは歪んだヒューマニズムであつて、それによつて農業の可能性が潰されるのはもつたない。その学生には「鶏、豚、牛はG M Oの飼料を食べているのに怖くないの？」と訊ねました。そこで返つてきた答えが、「そんなの知らない」。結局、今の食糧問題はなかなか情報が出てこなくて、知ってるか知らないかが最大のポイントになつている。本来は知つてからどう

考えるか、どう行動するかが大事なはずなのに。

昆 確かに農業や食品は、ナイーブな理解を絶対化してしまふようなことが多い。鳥インフルエンザのリスクがあるため、比内地鶏を完全にケージ飼いにした本誌の読者がいるんです。すると県から「地鶏は平飼いにして歩かせる必要がある。だからあなたのところは地鶏と称してはいけない」と警告を受けた。そこは比内地鶏の育種をした本家みたいところで、平飼いにすることがいかにリスクが高いことを知っているんですよ。しかしおかしな思考や歪んだヒューマニズムが連鎖してくと、「それではどうすればいいのか」という問いがなくなつてしまふ。これは危険なことですよ。

### まったく新しい 若者達が育つてきている

真山 最近、東大生や卒業生など若い世代と議論をしていて、強く感じるがあります。彼らはいわゆるエリートですが、そのことをあえて意識しなくても、国をなんとかしなければ、と切実に思っていることです。リーダーとして統べることを、若くして理解しているクラスが出てきたなと思うんです。

昆 それは興味深い。

真山 もし彼らが農家出身だったら、自分のキャリアに関係なく、故郷の農村に帰って経営しなければいけないと考えるでしょうね。一昔前のように、郷愁にかられて田舎に行くわけではなくて、誰もできないんだっただら自分たちがやるという若者が少しずつ芽生えてきた。あと20代から30半ばの層で特に増えているのが、「競争するのがどうして悪い。自分のやりたいことをやって結果を残すんだ」と考えるタイプ。頑張った人は頑張った分だけ見返りを得ればいいし、その代りに責任を持つ、という自覚を持ち始めたんじゃないでしょうか。

昆 僕も若い人の変化を感じるんですけど、期待しているんです。これは何が原因なんでしょうね。

真山 我々や上の世代は、なんでこんなにひどい目にあってるんだ、という不満を抱えながらも、しがらみがあって既存のものを壊せない。でも、若い世代にはそれがありませんから。壊すものすらない。だから私は彼らに「我々世代までの価値観はもう使い物にならない。あなたたちの目の前にはダメになった原野が広がっていて、その中でやるべきことを気づける好環境なんだ」と言っています。彼らはその話をキラキラし

た顔で聞いています。そこで我々ができることは、彼らに根気よく行動させる指導役を用意すること。農業でいえば、以前からいる経験者の出番になるでしょうね。若者に失敗も含めた経験をさせるには、バックアップも大切です。

あなたは小説に勝てないのですか？

昆 『黙示』の最後にアメリカができてきますね。外圧についてどう考えているか、ぜひうかがいたかった。『プライド』の政治家の話にも最後のどんでん返しにアメリカが出てきますよね。

真山 日本はグローバル、グローバルと言うわりに全然グローバルな視点がなく、情報的にはずっと鎖国の状態が続いていると思います。いまだにGHQに管理されてるとまでは言いませんが、日本の思い通りにいかないところがあるのにかかわらず、最後の結論だけを見ている印象がある。実際には世界からの様々な外圧が日本にはかけられているのに、それを見ようとしない。だから小説では「世の中、そんな簡単に動いてませんよ」とちょっと皮肉ったつもりでした。

昆 私もTPPは外圧としてうまく



## 真山仁

■プロフィール (まやま・じん)

1962年大阪府生まれ。87年に同志社大学法学部政治学科卒業。同年4月に中部読売新聞(のち読売新聞中部支社)入社。89年11月同社退職。91年フリーライターとなり、2004年『ハゲタカ』(ダイヤモンド社)でデビュー。07年『ハゲタカ』、『バイアウト』を原作としたドラマが大きな反響を呼んだ。徹底した取材と緻密な文体で現実の深層を見抜く、本格社会派の旗手として注目を集めている。

活かせばいいという思いがありません。TPPに反対する人たちは、敗北主義を利権化させたような存在だから、私からしたら恥づかしくてしょうがない。

**真山** 確かに論点のズレは感じます。当初、交渉に参加することへの反対が強かったことには驚きました。輸入反対を掲げる前に、小麦でもトウモロコシでも、頑張つて安く作つておもしろいものを作ればいいじゃないですか。その努力をしようと思わず、この資本主義社会の中、安いものに高い関税をかけるのがおかしいことであつて、これでは消費者が国益を享受できません。もしTPPによつて本当に農家が大打撃を受けるのであれば、関税がなくなったことで得た利益を回すなりして、手当てをするのが筋です。個別対策をすればいい話を全体論にしている気がします。そうした全体のプラスマイナスを考えるのは政治の仕事でもある。

です。カリフォルニアのコシヒカリで、我々がおいしいと思えるレベルのものなんて、ほんのわずかしかな

い。  
日本のお米は10aあたり500キロ程度獲れるのですが、品種によつてはちゃんと作れば1tの収量が期待できる品種もある。つまりコストが半分になるということ。そういうコメは単価が安くても収益は上がりやすから、国内で現在の半値で作ればいいんですよ。経営利益について考える農家が増えれば、自然とそうなるはず。

**真山** それと私が気になるのは、日本のコメじゃないとダメだ、という意見です。あれは生活に余裕のある人の意見ですね。今後、非正規雇用が増えて国民の年収が下がれば、40代でも20代と同じ給料しかない現象が普通になつて、食費が打撃を受けるはず。その時、安いコメを使つた牛丼や250円のお弁当を食べるニーズがあれば、それを提供するの

も国の仕事じゃないですか。それで日本のコメ産業が壊滅することは絶対にないと思います。  
**昆** だから農業に関しては、僕はそんなに心配する必要はないと思つています。少なくともお米に関しては、今より多い量が輸入されるとしても、ちゃんと作つていけば怖がるこ

とはない。コメ以外の酪農だつて畜産だつて、コストを下げる方法というのがまだまだ出てくるだろうし、まだまだ魅力のあるものを作れる可能性はある。そのためには多様な農業のかたちを残しておけばいいんです。

**真山** まつたく同感です。

**昆** 最後になりますが、本日は我々農業関係者の役割について話をしました。真山さんの考える小説家の役割を聞かせてもらえませんか。

**真山** ひとは、気づきを喚起することだと思つています。たとえば、さきほど話したような若い世代に対して、現実をベースにした想像図を書いて、「こういう未来にすることもできるはず」と提示する。「本当にこんなことができるのか？」と言わ

れた時は、「あなたは小説に勝てないのですか」と答えるようにしています。たとえ非難されても、それが問題提起になればいい。あとは読者がそれをどう咀嚼していくかだと思つています。

**昆** なるほど。真山さんの小説は本誌の読者を勇気づけるでしょうね。僕は読者をなんでも持ちあげるといふのは失礼だと思つています。彼らへの尊敬があるからこそ、きびしいことを書いて、プライドやノブレス・オブリージュを促す。『黙示』も同じ価値観で書かれた作品であることを強調して、ぜひお勧めしたい。ご活躍をお祈り申し上げます。

**真山** ありがとうございます。これをご縁に引き続きよろしく申し上げます。

**黙示** 新潮社  
1785円(定価) / 378ページ

農業散布中のラジコンヘリが小学生の集団に墜落した。撒き散らされる薬剤、痙攣する子供、大量死するミツバチ。若手養蜂家、農業の開発責任者、農水省の女性キャリア、それぞれの戦いが始まる。米中の食糧戦略、狙われる農地、予測不能の展開。



**プライド** 新潮社  
546円(定価) / 320ページ

逆境を支えるのがプライドなら、人を狂わせるのもまたプライド。現代を生き抜くために、絶対に譲れないものは何か。社会問題の深層に潜む、現場の人々の一筋縄ではいかない思いに光を当て、深層心理まで描きこんだ極上フィクション六編と掌編を収録。

